

# 故事成語「鶏口牛後」確認テスト（史記・戦国策） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

---

問1 ひげん。「鄙諺」は世間で言いならわされたことわざのこと。

問2 世間でよく言われる、俗なことわざ・言い伝え。（「鄙」はいなか・俗っぽいの意で、堅苦しくない俗世間の言い回しを指す。）

問3 寧(むし)ろ鶏口と為(な)るとも、牛後と為る無(な)かれ。

問4 いっそ（小さくとも）鶏のくちばし（＝一団の頭）となっても、（大きくとも）牛の尻（＝一団の末端）にはなるな。

問5 小さくとも、一つの集団・組織の長（先頭・頭）であること。鶏の口（くちばし）は小さいが体の先頭にあることからのたとえ。

問6 大きくとも、一つの集団・組織の末端（しんがり・下っ端）であること。牛の尻は大きいが体の後ろにあることからのたとえ。

問7 今西面し臂(ひぢ)を交へて秦に臣事せば、…（「今、西を向き腕組みをして秦に臣下として仕えんとすれば」と読む。「而」は置き字として読まない。）

問8 臣下（家来）として仕えること。

問9 どうして牛の尻（牛後）と異なる（＝違う）ことがあろうか、いや、同じことだ。

問10 ア。「何ぞ～ん（や）」は疑問の形を借りた反語で、「少しも牛後と変わらない（＝まさに牛後そのものだ）」と強く言い切っている。

問11 秦に従うのは牛後と同じだということ。（例：「秦に仕えるのは牛後になることだ」など、十五字以内で同趣旨ならよい。）

問12 腕組みをしたまま、抵抗もせず相手のなすがままに従う、消極的・屈服的な態度。

問13 ア。「寧ろ～とも」で一方を望ましいものとしてすすめ、「～無かれ」でもう一方を禁じる、願望・選択と禁止を組み合わせた言い方である。

問14 イ。大きな集団のしりにつくより、小さな集団でもよいからその先頭・長になるほうがよい、という意味である。

問15 西方の強国である秦に対して頭を下げ、その家来（属国）となって言いなりに従うこと。当時、秦は西にあり、東方の国々が秦に屈服することを「西面して仕える」と表現した。

問16 強国の秦に屈服してその末端（牛後）となるより、韓は小国であっても独立を保ってその長（鶏口）であるべきだ、という主張。（＝秦に従うな、という説得。）

**問17** ウ。「鶏口となるも牛後となるなかれ」は「鶏口牛後」そのものを言いかえた言葉である。(ア「寄らば大樹の陰」とイは逆の発想、エ「虎の威を借る狐」は別の故事成語。)

**問18** ア。「寄らば大樹の陰」は、頼るなら大きく勢力のあるものがよいという考え方で、「大きいものの末端より小さくても長であれ」とすすめる「鶏口牛後」とは反対の発想である。

**問19** イ。「鶏口牛後」の故事は司馬遷『史記』の蘇秦列伝、および『戦国策』韓策に見える。

**問20** 合従 (がっしょう)。蘇秦は、東方の六国 (韓・魏・趙・燕・斉・楚) が南北に同盟して西の秦に対抗する「合従策」をすすめた。(これに対し、各国を個別に秦と結ばせる張儀の策を「連衡 (れんこう)」という。)

**問21** (例) 大企業で埋もれるより、鶏口牛後で小さな会社の社長を目指すことにした。／彼は鶏口牛後の精神で、大手をやめて自分の店を開いた。(小さくても長になるほうを選ぶ、という意味が伝われば正解。)